
夜と桜の間で

haru12

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜と桜の間で

【Nコード】

N23650

【作者名】

haru12

【あらすじ】

夜の世界で働いているさくらは桜の木の下で不思議な男と出会う。その出会いから、さくらの知る現実とはかけ離れた世界へと導かれる事になる……

気づいたら、水商売にどっぷりと浸かっていた。

それが自分で恥じているとか、世間の目が怖いとか言うことは全く無い。

むしろ、幼少の頃に人見知りの激しかった自分が、人と人との触れ合いを生業としている職業に就いている事に少し褒めてあげたい。

「さくら」

物思いに更けているところを黒い肉厚なソファーに共に座っている沙希に声をかけられる。

さくらは、私のお店での源氏名。

ちなみに沙希も、私の左隣に座っているミルクティー色に染めた巻き髪がよく似合う彼女の源氏名だ。

「何？」

沙希の方を向くと、いつもはまん丸で可愛い目をして、アルコールでとろんとさせて私を見つめていた。

お店の客に言わせると、沙希の丸い目がアルコールが入ってとろんとなっていく様子が、お酒に酔った女の子らしくて可愛いらしい。

そんな彼女の真実の姿はザルだと言うことはここだけの話。

「お店終わったらいつもの所に行こうよ」

そう言いながら華奢な右手で、くいつとグラスを傾ける仕草をする。

「今日も行くの？」

問いかけると、いたずらっぽい笑みを浮かべて軽くうなづく。

「まあ、いいよ。私も呑み足りないし」

その答えを聞いた沙希は、嬉しそうに目尻を下げる。

沙希とは同性だが、素直な感情が顔に出る可愛らしさには少し胸がときめく。

……が、断じてレズビアンという訳では無い。

「じゃあ、拓弥に帰り寄ってもらおうように言っておくね」

沙希はソファから軽やかに立ち上がると、早速拓弥君のもとへと小走りで行ってしまった。

拓弥君とは、今、私と沙希が働いているこのお店『BLACK CATS』のボーイをしている。

お店には内緒で沙希と付き合い始めて、もう半年になる。

容姿は短髪の金髪で、パツチリ二重が特徴的な可愛い顔をしている。

19歳という年齢の割には、ヤクザ屋さんやら、チンピラさんやら、etc……とも対等に渡り合える度胸の強さと頼りがいのある中身で、実はお店の女の子からの人気も高い。

右の手首につけている、お気に入りのブランドのロゴが入った白い腕時計を見ると、針は午前2時ちょっと前を指していた。

そろそろ仕事が終わる時間。

普通に暮らしている人々には、もういい深夜のこの時間帯。
だけど、これから呑みに出る私と沙希には、まだまだ夜は終わらな
い。

まぶたを薄く開けると、真っ白い天井が目に見える。

頭の中は、薄く霧がかかった様に少しボンヤリとしていた。

朝の5時まで呑んでいたアルコールは、まだ少しだけ残っているようだ。

サイドボードに目をやると、丸い薄ピンク色をした時計の針は3時5分を指していた。

出勤の時間までは、まだまだ余裕がある。寝起きの気だるい余韻を、自分のぬくもりでほんわか温かいベッドの中で浸る。

こんなひと時に、ちよつと幸せを感じる。

そんなボンヤリと気持ちの良い頭の中で、呑みに行った先での会話を思い出す。

『最近ね、幽霊が出るって噂があるの知ってる？』

沙希と2人でよく行くお店【BARまつり】の角刈り頭がトレードマークになっている、少しいかついオカマちゃんマスターが言っていた。

あまり非現実な事は信じないのだが、本当にいたらいたで面白いと思う。

『えー？そんな話は知らないよ』

マスターは、そんな私と沙希の答えに口端をニヤリと上げていた気がする。

『川沿いにある1番大きな桜の木は知ってるわよね?』

大きな桜の木。

私の源氏名の由来にもなった、【桜見ヶ崎町】この町のシンボルだ。
2人の沈黙を肯定とみなしたマスターは、話を続ける。

『その桜の木に出るのよ。これが』

マスターは、両手を顔の前で垂らして俗世間でいう、幽霊のポーズをとる。

『えー? ウソだー』

沙希は、私と同様に現実的だ。

『ウソじゃないわよー。もう何人もうちのお客さんが聞いているもの』

マスターはそう言いながら少しむくれていた。

BARまつりのお客様は、地元の人が多いらしく、いろいろな地元情報がマスターの元へと集まってくる。

それにしても、少し気になる言葉。

うちのお客さんが聞いている?

こういう時って普通は『何人ものお客さんから聞いているもの』って言うものでは無いのかしら?

少し気になった私は、マスターに質問してみた。

『マスター、お客さんが聞いているって?』

マスターは、私が話題に乗ってきた事が少し嬉しかったのか、少

し声を潜めて雰囲気を出しながら話始めた。

『お客さんから聞き始めたのは、ここ1ヶ月くらい前からなんだけど……。ほら、うちのお店って朝方までやっているじゃない？うちのお店で遅くまで呑んでから帰る時に桜の木の前を通ると、笛の音色が聞こえるらしいのよ』

それを聞いた沙希が口を挟む。

『笛の音だけ？ そんなの全然ゾツとしないよー。それだけ聞くと、もしかしたら非常識な人が夜に笛の練習してるだけかもよ』

ねえ？ とケラケラと笑いながら沙希が私に同意を求める。

沙希の意見はもつともだ。

でも、マスターの話にはまだ続きがあった。

『まあ、笛の音が聞こえるだけなら話も終わっちゃうんだけど、ただそれだけじゃ無いのよ』

マスターは苦笑いを浮かべながら話を続ける。

『笛の音が聞こえるのは、桜に近づいた時だけなのよ。少し離れちゃえば何も聞こえないの。笛の音だけじゃなくて、人の息づかいをすぐそばで感じたり、変な破裂音が聞こえたりする時もあるみたいよ』

そう、その時はマスターの話をふーんと鼻であいづちを打つだけで終わった

しばらくして、BLACK CATの女の子の送りを終わらせた拓弥君が迎えに来たのだが、私はマスターの話が気になって1人

で歩いて帰った。

『えー、可愛い女の子が1人でこの暗い中を歩いて帰るのは危ないよー』

拓弥君の腕に自分の腕を絡ませた沙希が、ほっぺたを膨らませながら私に言っていた。

ベッドの上で上体を起こすと軽く伸びをする。

まつりを出て、沙希と拓弥君と別れたその後の出来事をゆっくり思い出す。

まつりのマスターが話していた、大きな桜が綺麗に咲き誇っていた。

暗い空に薄いピンク色が浮かんでいて、とても幻想的だった。

笛の音が聞こえる事を少し期待して、桜の木に近づく。

……が、聞こえてくるのは桜の近くを流れる川の水音だけ。

『なんだ、聞こえないじゃない』

独り言を喋りながら桜の木の幹にソツと触れた。

春の風が吹いた。

春の闇にひらひらと薄いピンクの雪が舞う。

人の気配を感じて後ろを向くと、花びらが降る中に白い着物を着た男が立っていた。

幽霊？

まさか……本当に……？

白い着物を着た男は、ゆっくりと近づいてくる。

怖くは無い。

怖くは無いけど、私の知っていた世界のものと、どこか異質なものを感じた。

少しずつはっきりと見えてきた男の表情は、どこか困ったように見える。

その表情を作りあげるパーツは、やはり普通では無いと思う。

男かと思えば、ただただ美形な女性のようにも見える。月に照らされておぼろげに見える切れ長な瞳は、金色に輝いているようにも見えた。

『こんな夜遅くに1人歩きは危ないですよ』

発せられた声は顔に似合わず低い音。

それと同時に、不思議なほど気持ちが落ち着くような響きが、とても心地良い。

『私は、噂になっている幽霊を見に來ただけよ』

子供に言い聞かせるような言い方に、なんとなく、むくれながら反論する。

『幽霊ですか？』

目の前にいる男は訝しげな表情を浮かべる。

まあ、幽霊を見に來たなどと、出会った酔っ払いに言われても理解できるものでは無いだろう。

自分で言っておいて、反論した言葉があまりにもアホらしくて情けなくなる。

『そつよ……。幽霊よ……。』

思わず小さな声で答える。

男が、それを聞いてクスリと微笑んだ気がした。

『もし、私が幽霊だったらどうするおつもりでしたか？』

男の問いに思わず恥ずかしさを覚える。
そして、先ほどまで心地良かった酔いが、徐々に醒めていくのを感じた。

『特に何もしないわ。ただ、私はこの間、幽霊と話したわよ、って人に話すだけ』

男は苦笑する。

私の答えにころころと表情を変えるこの男は、意外と感情表現が豊かな方らしい。

『そうでしたか、それでは残念でしたね』

困ったような笑みを私に向ける。

『幽霊は人の魂が姿を持って現われたものです。私は残念ながらそのようなものでは無いですよ』

ちゃんと足もありますしね。と補足もつけたした。

『そ、そうよね、ちょっと失礼だったわね……私』

素直に謝れず、少しぶっきらぼうに言うと、自分の家の方に向かって歩き出した。

『気をつけて帰ってくださいね。夜道は物騒ですから』

男の声が私の背中へと追いかけてきた。

そして、すぐその後に笛の音が春の風とともに聞こえて来た気がする。

「鈴木さんって、良い人だよー」

今まで同じ席で接客をしていた沙希が、私に向かってつぶやく。

「そうかなあ？」

そのつぶやきに対して、なんて答えれば良いのか言葉が見つからず、適当に返した。

「良い人だよー。さくらと仲が良いからって、暇人していた私まで指名入れてくれて、飲ませてくれてー。ごちそうさまね」

深くは考えた事は無かったが、そう言われると確かにそうだ。

1人指名するだけでも1時間2000円掛かる。

それに、1杯1500円するドリンクを、飲む量が決して少なく無い私と沙希に、惜しげも無くご馳走してくれるプラス、基本料金だ……。

普通に考えれば高い。

……が、地主で色々経営していて商売が上手くいっていると豪語している鈴木さんにとっては、対した金額では無いのだろう。

「いえいえ。今度、一緒にお礼のアフターにでも付き合ってもらえればOKだよ」

沙希に向かって言うと、沙希は顔をにんまりさせながら近寄ってくる。

「えーっ。私がお店の外までもついて行ったら悪いよー。それは2人きりで楽しんできて」

沙希はそう言いながら、更に詰め寄ってくる。

「それで、どうなの？」

小声で意味深な言葉を私に問いかけてくる。

「な、何が？」

質問の趣旨が分からず、問いかけに対して問いかけで答える。

「鈴木さんの事どう思ってるの？」

沙希の不意打ちな言葉の攻撃に、思わず私の周りの時間が一瞬止まる。

「だって、お金あるし、土地もあるし、紳士だし、身長も高いし、顔もそこそこ良いし、さくらの事大好きだし、良いところだらけじゃない」

沙希は、時間の止まっている私の事を気にもせず、自分の指を折りながら、鈴木さんの良いところを数えている。

「こんなに条件の良い人、めったにいないよー。付き合ってみれば？」

思わず苦笑いで返す。

沙希の言う通り、鈴木さんはとても良い人なのだ。

見た目も良いし、中身も良い。そして、社会的地位も高い方だと思う。

そんな人物に、特定のパートナーがいなくなれば、変な言い方にはなるが、かなりのお買い得物件なのだろう。

ヘルプでついた女の子が、鈴木さんを本気で狙っているという話もどこかから聞いた事もある。

「でもね、違うんだよね……」

沙希に聞こえるか、聞こえないかの声で呟く。

「ん？ 何か言った？」

案の定、沙希の耳には私の呟きは届いてはいなかった。

「ううん。 何でも無いよ」

私が答えると同時に、ボーイが「沙希さん、ご指名です」と沙希を呼んだ。

沙希は気だるそうに立ち上がると、私に向かって軽く手を振ってフロアに消えていった。

正直、ホツとした。

23歳で落ち着いてしまって恋愛に興味が無いとかいうわけでは無い。

どちらかというと、沙希と拓弥君を見ていると、うらやましいなと思う気持ちはある。

そして、職業上出会いが無いわけでも無い。

恋愛に興味があっても、出会いがあっても、ただ、興味を抱ける異性が現れないのが答えなのだろう。

……いや、興味のある異性は今1人いた。

別に恋愛感情を抱いているとかでは無い。

ただ、人的に何者なのだろうかという純粹な興味。

会えるかどうかは分からないが、今日の帰りにでも少し寄ってみようかな……と、密かに思った。

「でねー、さくらっつてば、人生をとつても損していると思うのー」

沙希は、BARまつりのカウンター椅子を左右に半回しながら、マスターに語っている。本日の沙希とマスターの会話テーマは、私の恋愛についてだった。

2人は、本人を目の前にしてずけずけずばとりたい放題だ。

「そうよねー。それは私も思うわ」

マスターは私に生ビールを出しながら、ちょっと哀れみがこもった目で私を見る。

こんな状況が続いているおかげで、仕事後のお酒なのになかなか酔いが回らない。

「むしろ、私がさくらちゃんだったら、片っ端から男を……」

マスターは妄想の暴走モードに入ってしまったところで、少し早めに女の子の送りを終えた拓弥君がお迎えに来た。

「お疲れ様ー」

沙希と私が声を揃えて、卓也君に労いの言葉を掛ける。

「お疲れ様です。じゃあ、行きましょつか」

拓弥君は、仕事後にも関わらず疲れた様子を少しも見せない。

それどころか、爽やかな笑顔を私たちに向ける余裕さえある。

その笑顔に、沙希だけではなく、何故かカウンター越しにマスターも目をハートにさせている。

沙希はカウンターにお代を置くと、ドアの前に立つ拓弥君のもとへと駆け寄った。

「あつ、私、もう少し飲んでから帰るよ」

出してもらったばかりの生ビールのグラスを、ドアの前で腕を絡ませあっている2人に見えるように、軽く持ち上げた。

拓弥君は笑顔のまま私に向けて軽く頷くと、沙希と一緒にまっりから出て行った。

ドアが閉じる前に、沙希のむくれた声が聞こえた気がする。

そんな様子を見ていたマスターが「はあー」と、1つ大きなため息をついた。

「どうしたの？ マスター？」

思わず声を掛けると、さっきとは比にならないくらいの哀れみを浮かべた眼差しで私を見つめる。

「本当、何がいけないのかしらねえ」

マスターは、右手で右頬をさわりながら呟いていた。

マスターの中では、私の話題はまだ終わっていないかったようだ……。

「マスター、もうその話はいいから！」

苦笑いを浮かべながらツッコミを入れた。「あははは」と、マス

ターは口を大きく開けて楽しそうに笑った。
釣られて、私も笑顔になる。

「マスターお会計」

テーブル席に座っているスーツ姿の3人組が、マスターに声をかけた。

マスターは「はいよー」と返事をしながら、私に軽く目配せしてテーブル席へと向かう。

1人でビールをちびちび飲んでいると、お会計を済ませた3人組が「課長ー、よろしく頼みますよー」など言い合いながら、にぎやかに私の後ろを通過して行った。

パタンとドアが閉まると、店内の音はスピーカーから流れるジャズのメロディーだけになった。

時折、テーブルを片付ける擦れるような音が耳に入る。

ジャズをつまみにして1人酒を楽しんでいると、ようやく心地の良い酔いが回ってきた。

「ところで、さくらちゃんが1人でまつりに残るなんて珍しいわね」
片づけが終わったマスターは、生ビールの入ったグラスを2つ持って私の隣に座った。

私の今まで飲んでいたほぼ空になったグラスと引き換えに、2つのうち1つのグラスを私にくれた。

「それはサービスよ」と、ウィンクをくれるのも忘れなかった。

「ありがとう」

素直にグラスを受け取る。

「沙希ちゃんは、本当にさくらちゃんが好きなのね」

マスターに言われると、なんとなくすぐぐつたい感じがする。

「ちょっと心配し過ぎだと思っ」

私の答えに「そんな事無いわよ！」と少し本気でマスターが反論する。

「だってね、今時の水商売の女の子が23歳にもなつて誰とも恋愛した事が無いだなんて、誰もが心配になるわよ」

そして、少し熱く語り始めた。

「まあ、そればかりは、私が男の人個人を好きにならないとどうにもならないですよー」

マスターは「ふう」とお酒の臭いのするため息を吐いた。

「それもそうね」

そう呟いてカウンターに肘をつく。

私の方を見るマスターの目はとても柔らかい。

母親を知らない私が言うのも変かもしれないが、多分母性に満ちた目とはこの事を言うのだろう。

格好はハッピにふんどし姿なのに……。

「マスターって、お母さんみたいだよね」

私の言葉が余程嬉しかったのか、にんまりと口元がほころんだ。

「あら、じゃあ私の事マスターじゃなくて、ママって呼んでもいいわよ」

声も心なしが弾んでいる。

そんなに喜んでくれるのならば、マスターの事をママと呼んでみてもいいかなあと、少し思った。

「ごちそうさまー。 おやすみなさいー」

マスターと軽い挨拶の言葉を交わし、まつりのドアをソツと閉める。

なんだかんだで、その後1時間程マスターと話が盛り上がった。時間を見てみると、私の腕時計は朝の5時を示している。

暗かった店内と違い、外はうつすらと明るくなっていた。

少しだけ覗いた太陽の光に照らされた町には、お腹を空かせたカラス達がごみ置き場に集まっているのが目に入る。

その光景を見て、思わず少し歩く速度を上げる。
なぜなら、沙希とまつりで別れた当初の目的を果たすためだ。

歩く速度は徐々に上がっていく。

終いには、走っていた。

町の建物達が、私の足の速さに合わせて、私の周りから過ぎ去っていく。

びゅんびゅんと風を切る音が耳に入る。

走っている最中に、覚えているあの男の姿がぼんやりと頭の中に浮かぶ。

あの男は、自分のことを幽霊では無いと言っていたが、そんなことは分らない。

幽霊に足がついていないなど、誰が決めたのかも分からない。

幽霊は、夜中にしか身動きが取れないものだとは仮定したら、急がないと今日あの男に会うことは出来なくなってしまう。

そんなにあの男に会うのが重要かと聞かれれば、多分そんな事

は無い。

素直な気持ち言葉を表すのならば『ただ単に、気になるから』
が1番適した言葉だろう。

太陽は徐々に昇っていく。

それに伴って空の明るさも増していく。

そんな中、ようやくあの男と前に出会った桜の木に辿りついた。
思わず、桜の太く育った幹に両手をついて体重を預ける。

「はあはあはあ……」

額から頬をつたり汗の雫が滴る。

久しぶりに走った体が、酸素を欲しがって肺を膨らます。

酸素を体中に巡らすための心臓が、激しく動いている。

正直、とても苦しい。

多分、アルコールが入っているから辛さ2倍中だろう。

そんな最中だというのに、目はしっかりとあの男を捜していた。

そんな自分が少し面白い。

しかし、明るくなってきた桜の下には、私が思い浮かべていた
その姿は見つからない。

やはり、あの男に会うにはもう少し暗い時間ではないといけな
いのだろうか。

さつき頭に浮かんでいた仮説が頭の中に再び過ぎる。

闇の中でしか身動きが取れない存在イコール幽霊なのだろうか？

思わず、頑張っ上げていた首がうなだれる。

桜の匂いがする風が、ふわりふわりと吹いている。

久しぶりの運動で火照っていた体には、とても心地よい。

近くを流れる川の水音も聞こえてくる。

しばらく風に吹かれる桜の匂いを感じていると、あれほど暴れまわっていた私の心臓は、だんだんとゆったりとした鼓動を打ち始める。

それと同時に呼吸の乱れも落ち着いてきた。

「帰ろう……」

自分でとった行動に満たされる事が無かった自分に、声をかけてあげた。

そうでもしないと、帰るための踏ん切りがつかない気がしたから。

ゆっくりと首を起こすと、もちろん自分が期待していた光景は何も目には写らなかった。

だが、その代わりに異様な光景が広がっている。

桜の木を中心に、直径5メートルほどの大きな円を描くように地面が黒く光っていた。

1つ2つ瞬きを試みる。

その後右手で目を擦ってみるが、その光景は何1つ変わらない。

「……!?!」

あまりの事に声が出ない。

なぜなら、よくよく見てみると、それは多数のカラス達が集まり、黒光りしている羽で地面に円を描いていたのだ。

ただ、それだけでは無い。

カラスの1羽1羽が、白濁した鈍い光を放つ目で私を見ていた。

「な、何これ」

現実離れた光景に後ずさる。

いや、正しくは後ずさるうとした。

白濁した目をこちらに向けたカラスは、私の足元にまでいて、動こうにも動くことができなかったのだ。

目に写る世界は、カラスを除いては全て私の知っている桜見ヶ崎町の桜の木の下だ。

一体何が起きているのだろうか？

『カアーーーーー』

地面に円を描いているカラス達が一斉に鳴いた。

一呼吸も乱れずに発した泣き声は、まるで1つの恐ろしい生き物が鳴いたようにも聞こえた。

足元から少しずつ、粟立っていく感覚が広がる。

空いているスペースは、私の2つの足が置かれているわずかな隙間だけ……。

ふと、町のごみ置き場に群がっていたカラスの集団を思い出す。もしかして、私もあのごみ置き場のごみのようにカラスたちに食べられてしまうのだろうか？

「い……いやっ」

自分の妄想だけはどんどん広がっていくが、自分の置かれている立場が何一つ分からず、異様な恐怖心から掠れた声が喉から漏れる。

勇気を持つて1歩だけ後ろに下がってみようと片足を上げる。もしかしたら、踏み出された場所にいるカラスは飛び去ってくれるのかもしれない。

しかし、現実にはそうはいかなかった。

淡い期待は、単なる淡い期待でしかなかった。

私の足が触れそうになっても、カラスは1歩も退かない。

それどころか、その場に集まっていたカラスたちは、一斉に翼を広げ私を威嚇する。

「！」

あまりの事に、声も出せなかった。

宙に浮いたままの片足をソツと元の場所に戻す。

桜に到着して、すぐに流していた汗とは全く違う汗が体中から噴き出していた。

今まで23年生きてきて、いろいろあったがここまで不可解な事は初めてだ。

あの男の仕業なのだろうか？

まだ1度しか会っていないのに、私は崇られているのだろうか？

そんな事を思っている内に恐怖しか無かった心の何処かから、少しずつ怒りの感情が湧き出てくる。

私が桜の木の下でカラスに囲まれてから、どれくらい経ったのだろうか？

状況は何も変わらずカラスは飽きもせず白濁した目で私を見つめ続けている。

その間も、私の思考回路には、徐々に怒りの感情が溜まっていく。

たった1度会っただけで崇るとか、カラスを使って脅すとか、どれだけ小さな男なの？

もう、心の中でのあの男はとてつもなくメチャクチャナ設定に

仕上がっていく。

「あー、もうムカつく」

そして、恐怖の感情から怒りの感情が勝ると、思っていた事が口を吐いて出る。

「なんで、私がカラスに怯えないといけないのよ」

怒りの感情が、次々と口から音になる。

肩にぶら下がっている黒いクロコダイルのショルダーバッグを手に持ち替える。

バッグを顔の前にやると、後ろを振り向き猛然と走り出す。

多分最初の何羽かは、足の裏の感覚からして間違いなく踏んだ。しかし、そんな事は関係無い。

こんな状況にずっと付き合っている程私は暇ではない。

家帰ったら寝て、起きたら営業して、出勤しなくちゃいけないんだからー！ と、心の中で叫びながら走り続ける。

本日2度目の全力疾走。

いろんな汗をかいたので、アルコールは抜けている。

おかげで、さっき走った時よりもだいたい体は楽だ。

後ろを振り向く勇氣は無いが、前からは次々とカラスが尖った口ばしを武器にして突っ込んでくるのが見える。

なので、背後の予想は簡単にできる。

止まってはいけない。

むしろ止まれない！

前から飛んでくるカラスの何羽かは避けた。しかし、全てのカラスからは避けられず、バッグで隠した顔以外の場所に攻撃を受ける。

カラスの口ばしは、私が思っていた以上に硬く鋭い。

痛い。

でも、痛いなんかは言ってもらえない。

多分、これは、一生のうち1回あるか無いかの、死ぬか生きるかの分かれ道だろう。

前から来るカラスが足元をかすった。

バランスを一瞬崩すが、なんとか持ち直した。

それを見てからか、バラバラだったカラスの狙いが足元に定まる。

バランスを崩しながらも、へろへろと走っていたが、左から飛んできたカラスに不意をつかれ、柔らかいわき腹の肉に硬い口ばし
が突き刺さる。バランスを完全に失った。

カラスは本当に学習能力が高いのだな、と妙な事を感じしながら体が地面に落ちていく。

鈍い衝撃音と共に、わき腹を中心に鈍い痛みが走る。

空を見上げれば、真つ黒な円を描いたカラスたちが雨雲のよう
に見えた。

そして、風を鋭く切る音が耳に入る。

急降下……。

黒い弾丸のように見えるカラス達に、死の恐怖を感じた。

「きゃあああああー」

口から、今まで出した事の無い悲鳴とともに、自分の中で何かが
弾けた。

私の周りだけが白い光に包まれた。

それが現実なのか、私の意識の中だけで起きたのかは分からな
い。

光の中で、今にも私を串刺しにしようと降ってきたカラス達は、
体の内側から弾けとんだ。

黒いカラスの代わりに、血と肉の赤い雨が私の全身へと降り注

ぐ。

た。

その様子は恐怖と安堵感が入り混じる不思議な感情をもたらし

白い光がうつすらと消えていく。

私の意識も、現実よりも私の深いところへと堕ちていく。

カラスに刺されたわき腹が熱い。

混沌とした意識の端で、あの男が見えた気がする。

あの男は、私を見て何を思うのだろうか？

ゆらゆらゆらゆら

なんだか揺られている

体がふわふわと浮いている

そして

じんわり暖かい

なんとなく

心地よい

それと反対に

わき腹には火が付いている

まぶたが重くて視界は開かないが

燃えている

熱いけど

体が動かない

水の音がさらさらと聞こえる

風の音もそよそよと聞こえる

草と草が擦れる音も聞こえてきた

ああ、なんだか心地よい

もうすでに暗闇にいるのに

さらに深いところへ堕ちていく……

ぱたぱたぱた……

なんだか子供の走るような足音が聞こえた。
体がだるい。

ゆっくりと重いまぶたを開くと、見慣れない木目に入った天井
が目に入る。

畳の香りがふわりと漂ってくる。

なんとなく懐かしい匂い。

ここは、何処だろう？

ぼやけた頭の中で思いたそうとするが、なかなか思い出せない。
首を右に傾けると、少し開いた障子の隙間から、鮮やかな花達
が咲き乱れる庭が見えた。

額から、ずるりと濡れた手ぬぐいが落ちた。

拾いあげてみれば、それはまだまだひんやりとした冷たさが残
っている。

さっきの足音の主が載せてくれたのだろうか？

のろのろと起き上がる。

体に掛けてあった布団を捲ると、自分が着ていたものが、少しい体のラインが出る黒いワンピースから旅館などで着るような浴衣に代わっていた。

薄いピンク色と浮き上がるような桜の花びらの模様がとても可愛らしい。

浴衣を巻くってみると、カラスに突付かれた傷は綺麗に処置されていた。

ひと際大きな傷を受けたわき腹には、白い布が巻かれていた。じんわりと、わき腹の傷が痛みだす。

それを切り口にして、体の感覚が少しずつ戻ってくる。

体の関節が痛い。

筋肉が痛い。

なんというか、全身が痛い。

あまりにも自分の体がぼろぼろで、笑いが出てきそうになる。ゆっくり立ち上がると、足には力が入らず、ふわふわと雲の上に立っているような錯覚を覚える。

そういえば、わたしのバッグは何処だろう？

部屋をぐるりと見渡してみると、木で出来たアンティークな鏡台と襖、障子の反対側には窓があり、その下にはまたまた木で出来た洗い机が置いてある。

そして、今まで私が寝ていた布団が引いてあるという凄くシンブルな部屋の中には、私のバッグは見当たらない。

そろそろと障子へ向かう。

とりあえずこの家の主に、看病していただいたお礼と、バッグを受け取りに行かなくては。

こんな体では、しばらく仕事にも行けないだろうし、BLACK CATの店長に連絡しないといけない……

あと沙希にもメールしないと心配するだろうな。

ふわふわとした足元は、安定感が無く体を前後左右に揺らす。障子から廊下へ出ると、花たちの甘い香りが私の鼻を刺激する。

「うわぁ」

庭を見ると、思わず感嘆の声が出る。

障子の隙間から見えていただけでも凄く鮮やかで綺麗と思ったけど、庭を目の前にすると鮮やかさは増していた。

花の種類には詳しくは無いし、センスがある方でも無いが、この庭は素晴らしいと素直に思う。

青、赤、黄色、ピンク、橙、紫、白、そして葉の緑色。

これだけの色が上手く組み合わさりまとまっている。まるでこの庭が大きな花束のように見える。

とにかく自然が好きなのだろう。

お礼には何か気に入るような花でも渡そうかしら。

廊下を見てみると、私が眠っていた部屋を角にして、前と左にL字型になっている。

どうやら結構な広さがあるらしい。

まあ、お庭がこれだけ広いのだから当たり前かな……。

家の主はどんな方なのだろうか？

こんなにも植物が好きで、見ず知らずの私を看病してくれたのだから、悪い人という事は無いだろう。

そんな事を想像していると、人の声が耳を掠る。

「……から」

この家の主だろうか？

多分、そう遠くにはいないだろう。

声のする方へと力の入らない足でふわふわと歩き出す。

声の出所は、私の部屋から前へ伸びる廊下の2つ目の部屋からだった。

部屋の前で1度止まり、なんて声を掛けるかを少し悩む。

いきなり障子を開いて『ありがとうございます』というのも無粋な事極まり無いだろう。

1人でその場に立っていると、ぼそぼそとした話し声が聞こえてくる。

その話し声の内容までは聞こえないが、電話などでは無く、どうやらその場に2人以上はいるようだ。

少し間が悪いようなので、少し時間を空けてから改めましようと思った。

くるりと体の向きを180度変えた矢先に、少し高めの可愛らしい声が廊下中に響きわたった。

「意識が戻ったんですねー！」

その声の主は、私のすぐ目の前にいた。

おかつぱ頭と赤地に大輪を咲かせた着物が、とてもよく似合う10歳くらいの可愛い女の子だった。

その子は私が目を覚ました事に、素直に喜んでくれているらしい。大きな黒目をきらきらとさせて私を見ているが、先ほど自分で思ったばかりだがなんてたって間が悪い。

予想していた通りだが障子の向こう側から静かに近づいてくる足音が聞こえた。

いきなりの命の恩人との対面に、心の準備が出来ずに少しうろたえる。

しゅつと軽い音をたてて障子が勢いよく開いた。

「何、盗み聞きしてんだよ」

……命の恩人像が、その第一声とともにガラガラと音をたてて崩れていく。

障子を開けて、私に最悪な印象を残したその男は、156センチの私よりも頭2個分くらい上から切れ長の目を嫌味な形に歪め、見下ろしてくる。

「盗み聞きなんかしてませんよ」

少し腹の立つた私も、斜めに見上げながら、嫌味をたつぷりと含ませた声で言い返す。

私とその男のたった2言だけで、その場の雰囲気は最悪なものになった。

「えっ？ えっ？」

かわいそうな事に、おかつぱの女の子は私と男のいきなりの衝突の場に居合わせ、心地悪そうに私と男を交互に顔を覗いている。

私とその男が目線で火花を散らせていると、部屋の奥から聞き覚えのある声が間に入る。

「高史、そんな言い方をしないで下さい」

深く心地のよい響き。

そして、この柔らかな口調……。

ゆつたりと少し気品のある足取りで奥から現れたのは、白い着物を身に纏った桜の木の下で出会った男だった。

予想もしなかった人物の出現に、思わず目を見開く。

「純明、だってこいつ、助けてもらったくせに盗み聞きしてたんだぞ」

そう言いながら、高史と呼ばれた男は、紫の着物の袖から伸びた手で私を指差す。

いちいち腹が立つ男だ。

「別に盗み聞きなんてしてないわよ」

予想外の人物の出現で、思わず声のトーンを少し控えめにしてしまつた。

「高史、彼女はけが人です。体の調子が悪い方に対して優しく接する事はできませんか？」

純明の口調は柔らかだったが、決して優しさは含んでいなかった。柔らかい表情を浮かべていたが、高史を見る目の奥には非難の色が見え隠れしている。高史はチツと舌打ちをすると、「分かったよ」と小さな声で言いながら、荒々しい足取りで部屋の奥へと戻つて行った。

「高史が失礼なことを言ってしまったって申し訳無いです。体調の方はどうですか？」

純明は、高史が部屋の奥へと戻っていくのを見届けると、私に困ったような笑みを浮かべて謝罪する。

「いえ、大丈夫です」

きつと私を助けてくれたのは、この人に違いないと確信する。

純明は色白……というよりも、雪のように真っ白い手で私の額に触れる。

その手は、とても冷たい。

「まだ熱がありますね。もう少し横になっていた方がよいですよ」

純明は、そう言いながら部屋の奥に向かって「少し待っていて下さい」と声をかけた。

奥からは何も返事は返ってこなかったが、純明は構わず私を今まで寝ていた部屋へとエスコートする。

「あの、あなたが私をカラスから助けてくれたんですか？」

半分以上答えの分かりきつた質問だが、確認せずにはいられない。何せ、私がカラス達に襲われている最中に思っていたことと、全く検討違いな事が起きているのだから。

純明は掛け布団を捲り、開いた障子の横で突っ立っている私に、横になるように促す。

体のふらふらしている私は、素直に布団に寝転がる。

「いえ、私は何もしていません。したことといえば、魔に深手を負わされたあなたを、ここに連れてきたことぐらいです」

純明は答えると、お日様の匂いがした真っ白な布団をふわりと掛けてくれた。

「魔にやられた傷は、とても深かったので、もう少し休んで下さい」

柔らかい微笑みを浮かべながら、私の額に水で濡らした手拭いを載せる。

熱が出ていると言われたから、急に火照りだした体には、ひんやりと冷たいものがとても心地良く感じる。

「あの、ありがとうございます」

素直にお礼を言う。

生まれてきてから今まで、あまり看病というものをされた事が無かったので少し気恥ずかしいものもあるが、とても嬉しかった。

「華が薬と白湯を持って来るので、それを飲んで下さいね」

そう言って、立ち上がるうとした純明の白い着物の裾を掴む。

掴んだ裾を見ながら、白い布地に金色の糸で、桔梗が線で描かれているのを今更ながら知った。

純明は、少し驚いたような顔で私を見る

「すみません、私が持っていてバッグをもらってもいいですか？」

私が聞くと、口元に笑みを浮かべて頷いた。

「華に、薬と一緒に持たせましょう」

純明は、私が着物の裾から手を放すのを見届けると、障子の向こう側へと消えていった。

正直、まだまだ聞きたい事はあったのだが、高史という短気そうな男が待っているのでは聞かずにおいた。

それに、もう少し、頭の中がはつきりしてから話をした方が良いだろう。

純明がいなくなっただけからすぐに、おかっぱの女の子が、ぱたぱたと可愛らしい足音をたてながら、部屋に入ってきた。

「この子の名前は華ちゃんかあ、とぼんやり思う。」

「純明様の薬はよく効くんですよ」

華ちゃんは、そう言いながら、私の上体を起こすのを手伝ってくれた。

白湯で薬を飲み込むところを見届けると、私の顔を守り、少し傷ついたバッグを枕元に置いてくれる。

「夜にはお粥を持ってきますね。それまでゆっくり休んでくださいね」

華ちゃんは、名前通りの可愛らしい笑顔を浮かべて部屋から出て行った。

私は、寝転がりながらバッグの中から派手なシヨッキングピンク色をした携帯電話を取り出す。

この電話には、沙希とお揃いの真珠の粒で出来たストラップ以外は何もついていない。

スライドさせると、いつもなら画面が光り、幻想的なタッチで描かれた蝶達が浮き出てくるが、今は、暗いまま具合の悪そうな私の顔を映すだけだった。

ああ、充電が切れてる……。

電源が切れた携帯電話の画面を見ながら、私の意識も暗い場所へと沈んでいった。

次に目を覚ました時には、辺りは薄暗くなっていた。障子からは、赤い光が申し訳程度に見える。多分夕方なのだろう。

頭はさつきに比べてすっきりしている。

どうやら、華ちゃんに渡された薬が効いてきているらしい。

右手には、画面が暗いままの携帯電話を握り締めたままだった。充電してお店に連絡しないといけない……

と、携帯電話にバッグから取り出した充電器を差し込む。

しかし、部屋を見渡してもコンセントらしきものは見当たらない。今時にしては珍しい部屋だなと思いつきながら、仕事柄持ち歩いているもう一つの携帯電話のバッテリーを取り出す。

バッテリーを交換して電源を入れてみる。

チャリンと軽い鈴のような音を鳴らしながら画面が光りだす。幻想的な蝶の上に、着信履歴38件、メール105件というただならない数字が表示されていた。

日付を見てみると、どうやらカラスに襲われた日から2日経過している。

2日丸々寝込んでいた事に驚く。

着信履歴を見ると、主に沙希と店長。所々に私の指名のお客さんと、まつりマスターを表すシゲさんの名前もあった。

メールを見てみると、これもほぼ同じようだ。

沙希からのメールは、最初はいつも通り可愛らしくデコレーションされたメールだったが、最後の方は、そんな余裕も無いような白と黒のメールで私の安否を気にしている。

店長からは凄くシンプルな文章だが、私がお家にいないこと、何か事件に巻き込まれていないかの心配をしている事が伝わってくる。

まつりのマスターからは、愛情溢れた文章がたくさん送られてきた。

そんなメールを見ていると、自然と涙が零れ落ちた。

自分が生きていることに対しての安心感と、こんなにも心配してくれている人がいるという嬉しさが、胸いっぱい暖かく広がっていく。

とりあえず、これ以上心配させてはいけないので、沙希に電話する事にした。

1コール、2コール目に「さくらー」と泣きそつな声で電話に出た。

「心配させてごめんね」

私の声に反応して、電話越しにスンと鼻をすすする音が聞こえた。

「何してたの？ 心配したんだからー！ 店長と一緒に家まで行ったりしたんだよー」

沙希は喋りながら、どんどん鼻声になっていく。

「ごめんね、なんかいろいろあって……」

沙希に、まつりの帰りの途中からの話しをする。

ついさっきまで寝込んでいた事も、まだ体の調子が良くない事も、簡単に伝えた。

「だから、拓弥に送ってもらえば良かったのに……」

言葉の端々で、鼻をすすする音が聞こえる。

「でも、さくらが無事で良かったよ。その家の住所が分ければ、私と拓弥で迎えに行くから……」

沙希がそう言い終わると、少し感情も落ち着いてきたのか、携帯電話を通じて納得できない空気が伝わってくる。

「でも、なんで救急車を呼ばなかったんだらうね？」

沙希の一言で、ぼやけていた頭が一気に覚醒しはじめる。

確かにその通りだ。

普通なら、救急車を呼ぶか、病院に連れて行くのが妥当なところだらう。

知らない人を家に上げて、ここまで診てくれるのは何かあるの
だらうか？

一瞬にして、頭の中に色々な憶測が駆け巡る。

「とりあえず、住所教えてもらって。すぐに迎えに行くから」

沙希は言葉にはしなかったが、私に警戒しろと注意を促す。

つばが上手く飲み込めず、のどがごくりと音を鳴らした。

「分かった。また、すぐに連絡するね」

言葉短く返事をする。

なんだか、のどがからからに渴き、声を上手く発する事が出来ない。

「店長と拓弥には言っておくから。さくらはとにかく体を大事にね」

沙希がそう言い終えると、電話の通話が切れる。

沙希の言う『体を大事に』という言葉は、きつとこれから先に起きるかもしれない何かも含めてあるのだろう。

通話が終わり、再び暗くなる携帯電話の画面を見つめる。

色々な不安が頭の中に押し寄せてくる。

改めて、ここは何処なのだろう？

気づくと、沙希と喋る前までは太陽の夕方を告げる赤い光が部屋を射していたが、今で蒼い闇が部屋を染め上げていた。

まるで、私の不安の色を写し出しているみたい。

そんなことを思った時、障子越しにほんわりとやわらかい光が目に入る。

「失礼しても良いでしょうか？」

華ちゃんの声が、静かだった部屋に明るさを持ち込む。

「どつぞ」

答えると、障子を開きひよこんと顔を出す。

「あれ、お客様はもう帰ってしまいましたか？」

そう言いながら入ってきた華ちゃんの持ってきたお盆の上には、湯のみが2つと和菓子が載った小皿が2つ、そして、ろうそくが火を揺らしながら載っていた。

「え？誰も来てないけど」

私が起きてから、誰かが訪ねてきた記憶は無い。

そもそも、ここに私の知り合いが来ることは無いのだ。

華ちゃんは、返ってきた言葉に少し戸惑うように首をかしげた。

「そうなんですか？」

華ちゃんは、不思議そうな顔をしながら布団の横にそっと座る。

「なんだか話している声が聞こえた気がしたので、お客さんが来ているのかと勘違いしちゃいました」

華ちゃんは、失敗しちゃったとでも言うように、少しはにかんだ笑顔を私に見せる。

「話はしてたよ。電話してたから」

私は、携帯電話を見せながら返事をする。

スライドさせて、画面に光が点くと華ちゃんの口から感嘆の音があがる。

「すごい。綺麗……」

画面を見つめる華ちゃんの眼差しは、綺麗なものに出会った時に見える感動そのものだった。

今時、携帯電話も珍しいものでも無いのに。と、思いながらも、華ちゃんの無垢な笑顔に思わず釣られてしまう。

気づいたら、蒼い闇も完全なる黒い闇に変わっていた。

暗闇の中で、ろうそくの火と携帯電話の光が、こんなにも明るいものだと思われられる。

「華ちゃん、停電しているの？」

ちょっとした疑問が口を吐いて出る。

華ちゃんは、携帯電話から視線を私に移す。

「ていでんって何ですか？」

返ってきた答えに、次は私が戸惑う番だった。

「えっと、暗くなってきたし、明かりを点けないのかなあ……って」

しどろもどろに答えると、華ちゃんは「ああ」と小さな声をあげる。

お盆の上にあったるうそくを持ち上げると、部屋の隅にあった何かに火を移した。

火を灯した一帯が、ほわりと明るくなる。

「忘れてました。暗くなってきたから、明かりを点けに来たんです」

そう言いながら、反対側に火を灯すに行くと、部屋の中が暖かい光で満ちた。

華ちゃんが火を灯したのは、昔々何かの教科書で見たことのある行灯にとてもよく似ていた。

電気じゃなくて、火で明かりを点けるのも良いものかもしれない。

そんなことを思うと同時に、心の隅から何か妙な違和感が広がる。

沙希との会話を思い出す。

もう少し、自分の周りで何が起きているのかを慎重に考察する必要があるのだろう。

そんな事を考えている私に、華ちゃんが笑いかける。

「2日間何も食べていないから、お腹が空いたでしょう。お粥をこれから作るので、もし食べれるようだったら、お茶とお菓子食べて待ってて下さいな」

そう言いながら、お盆の上に載っていた湯のみを1つと、小皿に載せられた牡丹の花が模られた和菓子を1つ、布団の横に置いてくれる。

のどが渴いていた私がお茶を飲むところを見届けると、華ちゃんには笑顔を浮かべたまま部屋から出て行った。

ぬるくなつたお茶からは、ほんのり桜の匂いが漂っていた。

この家は、とても不自然だった。

現代社会の匂いが何もしない。

それだけでは無い。

音が無いのだ。

生活する音。

草や葉が揺れる音。

風の音。

この部屋に灯された行灯の明かりと時折音を奏でる携帯電話が無ければ、自分が生きているのかさえも分からなくなるだろう。

あの後、沙希が店長には伝えておくと言われたが、一応自分でもメールをしておいた。

そして、まつりのマスターにもメールをし、他のメールも少しずつ返していった。

電源を入れてから、センターに溜まっていたメールも続々と入ってくる。

気づいた時には、メールの総数が300件になっていた。

バッグの中身を確認すると、化粧品一式、ライターが1つ、ハンカチが1枚、キラキラとデコレーションされた名刺入れ、お気に入りのバニラの香りのする香水、ピンクのお気に入りのブランドのお財布、部屋の鍵、携帯電話の電池式充電器と、この間買って入れっ放しにしていた単3電池。

何1つ無くなったものは無い。

少しだけ安心すると、目の前に置いてある和菓子をせっかくなので頂く事にした。

小皿を持ち上げて見てみると、花びらが1枚1枚丁寧に重ねら

れ、お菓子だとは思えない程の精巧な作りをしている。

一口分を串を使って口に入れると、久しぶりに感じた甘味は体中に広がっていく。

栄養を欲しがっていた脳が、もっとくれと促す。

気づいた時には小皿に載っていた牡丹の花は消えて無くなっていた。

すっかり冷めてしまったお茶を飲んで一息ついたところに、お盆に小さな土鍋を載せて純明が運んできた。

「具合はどうですか？」

「おかげ様で、さっきよりも頭はすっきりしています」

私の答えに「良かった」と笑顔を作る。

純明は、私の横に座ると土鍋の中をレンゲで掬い取り、ふうふうし始める。

「あ、あの、自分でできますから」

少し焦ってその行為をやめさせる。

さすがに、食べさせてもらうのは恥ずかしすぎる。

「そうですか？」

純明はそう言うと、小さな机を取り出し、その上に湯気のたつ土鍋を置いてくれた。

「どうしてあの時間にあの場所にいたのですか？」

純明は私に向かって問いかける。

その表情は柔らかいが、けして優しい顔では無い。目の奥にはナイフのような冷たい光を持っている。

「どうしてって……」

少し口ごもる。

まさか、あなたに会えるかと思って……なんて事は言えるはずも無い。

純明は、表情1つ変えずに私の答えを待っている。

ふと、答えに困る事も無い事を思い出す。

なぜなら、あの道は家への帰り道。あの道を通っても、咎められる理由など1つも無い。

「職場からの帰り道なので通りました。 いけませんか？」

一応、助けてもらったのであまり強い口調にならないように気をつける。

「あの先に家があるのですか？」

純明は、少し納得のできないような表情になる。

納得も出来ないも何も、あの先20分くらい歩いたところには、マンションや一軒家がたくさん立ち並んでいるのだが……。

何をおかしいと思うのだろうか？

「家はたくさんあるじゃないですか？ マンションも、一軒家も……」

「まんしょん……?」

首を傾げる純明を見て、なんだか話しが噛み合っていない事に妙な感覚を覚える。

そう言えば、華ちゃんと話した時にもこの妙にずれた感覚を感じた。

むしろ、この場所自体に違和感を感じる。

私の知っている世界とは、何か違う気がするのは気のせいなのだろうか？

「すみません。携帯電話を充電したいので、コンセントを借りてもいいですか？」

自分の仮説が正しくない事を確かめたくて、質問で試してみる。

純明は、困ったような表情を浮かべて口を開く。

「あの、けいたいでんわとは何でしょうか？ こんせんというものも聞いた事が無いのですが……」

その返答に、血液が一瞬止まったような感覚が頭を占める。

それは、くらくらとした不快感を伴い、自分のいる現実から逃げ回りたい衝動に駆られる。

とてつもなく山奥の、現代文明に追いついていない田舎にでも連れて来られてしまったのだろうか？

それとも、カラスに襲われたシヨックでまだ自分の意識の中だとか……。

その両方が正しく無い事は、私が1番よく知っている。

今の日本に、どんな田舎にでも現代文明に追いついていない場所なんか何処にも無い。

そして、自分の意識の中で、こんなにもリアルな感覚は無いと思う。

むしろ、意識の中での出来事であって欲しい。

それとも、これは何かの陰謀で私の事を完全に騙しているのかしら？

「あの、大丈夫ですか？ 顔色がすぐれませんが……」

純明の一言で、ぐるぐると回していた思考回路がストップする。

「いえ、大丈夫です」

そう答えたものの、あまり大丈夫では無い。

「とりあえず、お粥も冷たくなってしまっているので、先に召し上がって下さい。話はあとでにしましょう」

純明は、そう言いながら立ち上がるが、私は食べるどころでは無い。

とりあえず、1つだけ知りたい。

部屋を出て行く寸前の純明に大声で問いかける。

「あの、1111はどこですか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2365o/>

夜と桜の間で

2010年11月11日18時53分発行